

13 ホンデュラスにおける養豚関連資料

(1) 養豚・家畜飼養規模

養豚規模一平均所有豚数（従来種も含む）

	カタカマス	エルパタステ	フテイカルパ	サンペドロデカタカマス
種雄豚	25.0	2.7	11.2	4.7
種雄豚	1.0	0.4*1)	1.0	1.7
肥育豚	120	0.2	52.3	0.7
子豚	61.5	2.4*2)	10.3	22.3

注*1) 共有している種雄豚が村に2匹

*2) 子豚を飼養している家が5軒

家畜（豚以外）規模

	カタカマス	エルパタステ	フテイカルパ	サンペドロデカタカマス
子牛	48.7	0.9	10.8	14.0
乳牛	54.7	0.9	9.3	14.0
牧牛	6.7	0	13.0	30.7
労働牛	0	0	0	0.3
にわとり	10	13.6	22.5	32.3

(2) ホンジュラスにおける肉豚（豚肉）の流通・市場・価格政策等

1. 豚肉の流通

豚肉の流通には大きく分けて仲買人を通すものと通さないものに分けられる。仲買人を通さないものは、

1) 生産者から直接加工業者に渡る場合

加工業者が自ら持っている農場や加工業者と委託契約を結んでいる農場から出荷される豚である。

このルートを通る豚は granja（舎内で飼育される血統の良い豚）のものが多い。

2) 生産者から直接最終消費者に渡る場合

これは田舎の小規模養豚農家が自ら屠殺し、周辺の住民に販売するもので、交通手段の発達していない農村でよく見られる形態である。

このルートを通る豚は criollo（舎外で飼育される雑種豚）が多い。

2. 食肉価格動向

- ・ 豚肉は常に他の肉より価格が高い。
- ・ 年の前半が後半より豚肉価格が低く、11月、12月に豚肉の価格が上昇する。

3. 豚肉等級

豚舎で飼育した豚（GRANJA）と放し飼いで育てた雑種（CRIOLLO）によって値段が違う。枝肉で1～1.50 レンピーラ/ポンドの差が見られる。

枝肉の重さと背脂肪の厚さによって1～3級と等級外が決められている。

1級・・・枝肉にして124～200ポンド、背脂肪1.5インチ以下

2級・・・枝肉にして200ポンド以上、背脂肪1.5インチ以下

3級・・・背脂肪1.5インチ以上

等級外・・・種豚や年をとった母豚

この等級を使用して購入するのは大きな加工会社で、GRANJA で飼われた豚に対してである。最近、CRIOLLO に対しても背脂肪や体重により等級を付ける傾向が出てきた。普通田舎で屠殺し販売する場合は、肉の質ではなく重量のみにより価格が決定される。

4. 豚肉および加工品の輸出入

ホンジュラス中央銀行の統計による、豚肉製品（ハム、ベーコン、骨抜き肉）などの輸出入を表に示す。しかし、当国の食品加工業者に対して調査をした結果、どの会社も輸出は行っていない。

また、当国の主要輸出品である牛肉の輸出を扱っている5大パック業者では豚肉の輸出を行っていない。豚肉及びその製品がどのような過程で数値として出てきたのか品目のカテゴリーが曖昧なため正確に把握することは難しい。

表 ホンジュラスの豚肉・豚肉製品の輸出入（1991-1994）

	輸 出		輸 入	
	重量 (kg)	価格 (レンピーラ)	重量 (kg)	価格 (レンピーラ)
1994	100,399.20	984,413.95	248,715.30	3,935,384.26
1993	120,603.10	1,178,856.09	323,967.20	4,047,797.05
1992	14,370	295,044.60	-	-
1991	5,358	101,858.85	-	-

資料：中央銀行

5. 豚肉管理

屠殺時に天然資源省が寄生虫の検査を行っている。また、加工品については厚生省食品コントロール課が抜き打ち検査を行っているが、職員数が少ないため、周年を通して行っていない。

6. 農業融資

政府の養豚融資はない。養豚農家が融資を受けるのは市中銀行からであるが、現在貸付利息が30%を越えているため、養豚への融資は行いにくい。また、PROCARSAが養豚農

家へ融資している例はある。

7. 農業近代化

養豚業は大きな土地を使用しないため、農地改革で与えられた土地の売買に影響される要素は少ない。

8. 要約

- 1) ホンジュラスにおける養豚業は小規模で、9頭以下の豚を所有している農家が全体の91.1%で、これらの農家の豚の総数は全体の55.2%を占めている。
- 2) 地域により養豚の特徴がでている。
大規模養豚（100頭以上）は2大消費地（テグシガハ、サンペドロスーラ）周辺に多い。
特にサンペドロスーラ周辺に大規模養豚場が集中している。
中規模養豚（10～100頭）は農業地帯に多く、プロジェクトサイトのオランチョ県もこのグループに属する。
小規模養豚は消費地に遠く、比較的貧しい県に多く見られる。
- 3) 豚肉の嗜好はホンジュラス北部に強い。
- 4) 豚肉流通においては仲買人が介在するケースとしないケースがある。
介在しないケースは消費地周辺の大規模養豚農家が直接加工業者等に販売する場合と、交通機関が未発達な地域で生産者自らが豚を屠殺し、周辺の住民に豚肉を売るケースがある。
仲買人が介在するケースは企業的仲買人が養豚地域で豚を集荷したり隣国から輸入する場合、消費地の豚肉販売業者が仲買人を兼ねている場合、消費地から遠い中小養豚農家から豚を購入し都市の仲買人に中継する仲買人のケースがある。
- 5) 豚肉の等級は少数の加工業者がカテゴリーを持っているだけで、多くは豚重量により価格が決定される。
- 6) 豚肉の需要が供給を上回っているため、毎年周辺国から不足分を輸入している。
- 7) 豚肉加工業者は近代的な設備を持った大規模なものと同家内工業的に生産する小規模なものが併存する。

(3) ホンデュラスにおける改良種豚を飼養した養豚経営の収益性

1. 養豚農家の生産技術成績

	一般農家の平均	中核養豚農家の平均
年間分娩回数	1.9 回	—
生涯分娩回数	4.4 回	—
平均産子数	7.7 頭	10.3 頭
平均離乳頭数	6.6 頭	8.0 頭
離乳日数	—	51 日
出荷月齢	—	6.9 ケ月
出荷体重	—	124 Lbs

注) 中核養豚農家：繁殖雌豚を10頭程度以上飼養する豚舎を有する農家

2. 改良種豚を飼養した生産技術指標

	生産技術指標
年間分娩回数	2.0 回
生涯分娩回数	5.0 回
種雌豚更新年数	2.5 年
種雄豚更新年数	2.5 年
平均産子数	8.0 頭
平均離乳頭数	8.0 頭
離乳日数	45 日
肥育豚出荷月齢	7 カ月目 (6カ月間飼養)
肥育豚出荷体重	100 kg

備考：各指標については、ホンジュラス国での暑熱環境などの生産に関する要因の影響が現状では確認できないため、実態調査の成績および日本国内での成績などを参考にし、やや低めに設定。

3. 中核的養豚農家（繁殖雌豚12頭一貫経営）における経営試算
生産技術は指標に準じる

1) 生産費

(計算根拠別添資料)

	経営全体/年間	肉豚1頭当たり
① 労働費 年間常時一名を雇用する	12,750 Lps	66.4 Lps
② 飼料費	240,691.2 Lps	1,253.6 Lps
③ 光熱費	0	0
④ 衛生費	4,490 Lps	23.4 Lps
⑤ 種豚の減価償却費	11,360 Lps	59.2 Lps
⑥ 建物等償却費	1,848 Lps	9.6 Lps
⑦ 輸送費	10,800 Lps	56.3 Lps
生産費合計	281,939.2 Lps	1,468.4 Lps

2) 収入 (肉豚販売収入) :

313,344 Lps 1,632 Lps

3) 収益性

*利益 = 収入 - 生産費 = 313,344 Lps - 281,939.2 Lps
= 31,404.8 Lps

肉豚1頭当たりの利益 = 1,632 Lps - 1,468.4 Lps = 163.6 Lps

*所得率 = 所得 (ここでは利益) ÷ 収入 × 100 = 31,404.8 Lps ÷
313,344 Lps × 100 = 10.0%

経営試算の計算根拠

1) 生産費

①労働費 : 12,750 Lps (年間支給額)

$$30 \text{ Lps (日給)} \times 365 \text{ 日} + 900 \text{ Lps} \times 2 \text{ 回 (年2回支給)} = 12,750 \text{ Lps}$$

②飼料費 : 24,0691.2 Lps (年間飼料費総額)

ポンド当たりの飼料費単価については種・肉用飼料を1.63 Lps、子豚前期飼料を2.60 Lps、子豚後期飼料を1.98 Lpsとする。

$$\cdot \text{種雄豚 } 5 \text{ ポンド (一日給与量)} \times 365 \text{ 日} \times 1.63 \text{ Lps} \times 1 \text{ 頭} = 2,974.8 \text{ Lps}$$

$$\cdot \text{種雌豚 } 2,185 \text{ ポンド (一頭当たり年間給与量)} \times 1.63 \text{ Lps} \times 12 \text{ 頭} \\ = 42,738.6 \text{ Lps}$$

$$\cdot \text{子豚 } \text{年間生産子豚数: } 8 \text{ 頭 (1腹分娩数)} \times 12 \text{ 頭 (母豚数)} \times 2 \text{ 回 (1母豚年間分娩回数)} \\ = 192 \text{ 頭}$$

$$14 \text{ ポンド (前期飼料量)} \times 2.6 \text{ Lps} \times 192 \text{ 頭} + 87 \text{ ポンド (後期飼料量)} \\ \times 1.98 \text{ Lps} \times 192 \text{ 頭} = 40,062.7 \text{ Lps}$$

$$\cdot \text{肥育豚 } 495 \text{ ポンド (1頭当たり給与量)} \times 1.63 \text{ Lps} \times 192 \text{ 頭} \\ = 154,915.2 \text{ Lps}$$

③光熱費 : 0

ホンジュラスでは農村へ電気が配線接続されていない

④衛生費 : 4,490 Lps

種雄・雌豚に豚コレラ、駆虫剤、ビタミン、抗生物質等を接種または投与する。
種豚1頭当たり50 Lps \times 13頭 = 650 Lps

子豚に鉄材、豚コレラ、駆虫剤、ビタミン、抗生物質等を接種または投与する。
子豚1頭当たり20 Lps \times 192頭 = 3,840 Lps

⑤種豚の減価償却費 : 11,360 Lps

$$\text{種豚購入費: } 2,200 \text{ Lps (雌)} \times 12 \text{ 頭} + 2,000 \text{ Lps (雄)} \times 1 \text{ 頭} \\ = 28,400 \text{ Lps}$$

$$\text{種豚年間償却費: } 28,400 \text{ Lps} \div 2.5 \text{ 年 (耐用年数)} = 11,360 \text{ Lps}$$

備考: 種豚購入費は雌豚については分娩前まで、雄豚については交配に使用できるまでの経費を含む。

⑥建物等減価償却費 : 1,848 Lps / 年

豚舎はレンガ積み、または木造で、簡易な施設が一般的であり、建設資材を購入し自前の労力等により建設するケースが多い。

当飼養規模の施設を建設するための経費は約28,000 Lpsを要する。

$$\text{建物等減価償却費} = [28,000 \text{ Lps (建設費)} - 280 \text{ Lps (残存価格 1\%)}] \div 15 \text{ 年} \\ = 1,848 \text{ Lps / 年}$$

⑦輸送費 : 10,800 Lps (年総額)

肉豚は一般に販売のためテグシガルパへ輸送される。トラック1台当たりの輸送能力は約32頭で、その輸送費は借上げ料と運転費を含め1,800 Lpsを要する

$$\text{年間輸送経費} = 192 \text{ 頭 (年間肉豚輸送頭数)} \div 32 \text{ 頭 (1回の輸送頭数)} \\ \times 1,800 \text{ Lps} = 10,800 \text{ Lps}$$

2) 収入 (肉豚販売収入) : 313,344 Lps

$$200 \text{ ポンド (肉豚体重)} \times 68\% \text{ (枝肉歩留まり)} \times 12 \text{ Lps (枝肉1ポンド当たり単価)} \times \\ 192 \text{ 頭 (年間肉豚出荷頭数)} = 313,344 \text{ Lps}$$